

自ら学び、考え、社会を拓こうとする子どもを育てる社会科学習

～思考力・判断力・表現力を育む授業を通して～

単元名 地域の発展につくした人々（水田に広がる用水路～松井用水路～）

宮崎県

宮崎市立清武小学校

指導教諭

三角 友香

## 1 研究主題とのかかわり

新型コロナウイルス感染拡大により、情報化はさらに加速し、学校を含む社会のいたるところでICTの活用が日常のものとなった。さらに、ウクライナ情勢をはじめとし、国際秩序の危機や価値観の多様性など、人々の生活環境はめまぐるしく急速に変化している。こうした社会の中で、次世代を切り拓く子ども一人一人が、個人と社会の成長につながる新たな価値を生みだしていくことのできる“持続可能な社会の形成者”として、成長していくことが期待されている。

また、宮崎県の実態として、各種調査等から「複数の資料を関連付けて読み取ること」「学習問題の解決に必要な情報を選択し、その情報を関連付けたり総合したりして説明すること」に課題があることが分かった。これらの結果や現状から、問題解決的な学習を核とした単元構成や評価の工夫を取り入れるとともに、思考力・判断力・表現力を育む具体的な授業の在り方について研究を進め、指導方法の工夫・改善を図ることにより、「自ら学び、考え、社会を拓こうとする子ども」を育てたいと考え、本主題及び副題を設定した。

## 2 研究の視点

### (1) 単元構成の工夫

身近にある素材を取り上げることで、児童はその教材に対して、親しみをもって取り組むことができるだけでなく、自分自身や自分の生活とのかかわりで考えたり調べたりすることができる。そのことは、地域社会の一員としての自覚を育み、やがて社会の形成者としての自覚につながっていくと考えた。そこで、地域の素材「ひと・もの・こと」にふれることができる教材づくりを行うこととした。そのために、「問い」を整理し、身に付けさせたい資質や能力を明確にしたうえで、地域素材を「どの場面で」「どのように」取り上げるか、意図的に位置付ける必要がある。

### (2) 「比較・関連・総合」して考え、表現させる学習活動の工夫

提示した資料から読み取った事実をもとに「問い」を児童にもたせる必要がある。この思考の中でさまざまな考えをもつようになり、子どもは社会的事象の特色や意味などを考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりすることができるようになる。そこで、「比較・関連・総合」して考え、表現させる学習指導の充実を図ることが必要である。

考察に向かう「問い」	問い 連 通 意 味 を 多 角 的 に 考 え る た め の 問 い	<p>◇「社会を知る」ための問い 様子、仕組み、過程、特色など、社会的事象を調べて考えていく活動に向かう問い (どのようになっているか)</p> <p>◇「社会がわかる」ための問い 社会的事象の背景を考え、説明する活動へ向かう問い (なぜか、どうしてか)</p>
構想に向かう「問い」	判 断 す る た め の 問 い	<p>◇「社会に生きる」ための問い 合理的な手段や方法を選択・決定し、社会的な判断へ向かう問い (どうしたらよいか)</p>

【資料1 「問い」の分類】

### (3) 子どもにかえる評価の工夫

宮崎県小学校社会科研究会では、1単位時間ごとの指導のねらいを踏まえて、評価の観点を絞り、評価計画を作成することを重視している。その中で、児童の学習状況を的確に把握するとともに、その結果を次の指導に生かすことが重要であると考えている。そこで、学習評価を「本時の目標を達成するための評価」「単元の定着をみるための評価」の2つの視点から考え、単元の指導計画に位置付けていくことにした。また、単元の指導計画に位置付けた評価計画は、児童の様子や学習状況に応じて、適宜、よりよいものにしていくなど、柔軟性をもって取り組むこととした。

### 3 研究の実際

#### (1) 単元構成の工夫

本校の校区内を流れる清武川から取水し、地域の水田を潤している松井用水路を教材として取り上げることにした。普段自分たちが、何気なく見ている場所が、昔から人々の生活にとって欠かせないものであることを知ることができ、自分たちの暮らしにつながる教材でもある。こうしたことを踏まえて、1時間ごとに「問い」を整理したり、地域素材の効果的な取り上げ方を検討したりするなど、単元構成の工夫を行った。

#### (2) 「比較・関連・総合」して考え、表現させる活動の工夫

##### ① 考え、表現する力を支える指導

考えたり、表現したりするために、資料を読み取る力は重要である。そこで、教科書や副読本では、キーワードとなる言葉や文章と写真などの資料を結び付けたり、線を引いたりしながら調べるよう指導を行った。また、昼休み後の「三計タイム」(昼の15分間の学習)を利用し、写真やグラフを読み取る学習、クラゲチャートやYチャートなどの思考ツールを使い、考えをまとめる学習を反復して行った。

##### ② ICTの活用

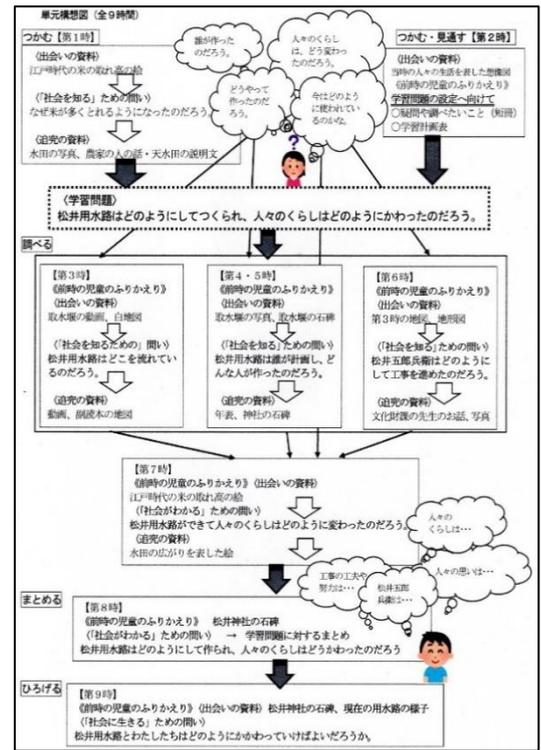
ICTは、必要な場面で「手段」として使用することが重要であり、使用することが「目的」になってはならない。ICTの有効性は、①視覚化②共有化③焦点化が挙げられる。本研究では、自分の考えを図や文章に表したり、友達の考えと比較して相違点を見つけながら考えを深めたりする際に利用した。また、発表する際に資料を拡大して提示したり、紙媒体で作成した地図をタブレットで読み込んだ上に写真に読み込んだ上に関連する写真を選んで付加したりするなど、紙媒体だけでは難しいまたは、時間がかかる場面で活用することで、思考力・判断力・表現力の育成を図った。

#### (3) 子どもにかえる評価の工夫

授業中の発言、ノートやワークシート、ふりかえりカードなどを活用し、「本時の目標を達成するための評価」「単元の定着を見るための評価」を行った。さらに、ICTのアプリケーションのアンケート機能を利用した自己評価を毎時間実施した。この自己評価は、すぐさまグラフ化され、児童の氏名も分かるようになっている。この機能を利用し、評価の低かった児童への個別指導を行ったり、全体での復習を行ったりした。こうした評価を通して、指導改善を図るようにした。

### 4 研究の成果と今後の課題 (○：成果、●課題)

- 実際に休みの日に、用水路を見に出かけたり、農業をしている方に話を聞きに行ったりするなど、興味関心が高まり、意欲的に学習に取り組むことができた。
- コロナ禍のため、グループ活動ができない中でも、自他の考えを比較して自分の考えを加筆修正することができた。調べ方を理解し、関連付けて考えたり、まとめて表現したりすることができるようになってきた。
- 資料や「問い」を精選するとともに、ICTを効果的に活用する力を育成する必要がある。
- 評価方法や内容、評価の場面などについては、さらに研究を継続していく必要がある。



【資料2 単元構成図】